

コラム 緑化植物 ど・こ・ま・で・き・わ・め・る

ホザキナナカマド (*Sorbaria sorbifolia* L. var)

福田尚人 (有限会社 開成舎)



地域の自然環境と調和したのり面緑化を考えると、どのような木本植物を選択すべきか大いに悩ましい。北海道の冬は、のり面の植物に様々な試練を与えている。とくに、切土のり面は厳しい。積雪が落ち着かない急勾配のり面は、寒風にさらされて土が長期にわたって凍結している。また、融雪時期には、積雪のグライドによって株ごと引きむしられたり、枝や幹が折られたりする。そこで、“現場のことは現場に教えてもらうのが一番”と、のり面を見て回っている。

侵入している植物種にはバラ科のものが結構多く、エゾイチゴ、クマイチゴ、カラフトイバラ、ホザキシモツケ、ホザキナナカマドなどがある。なかでも、ホザキナナカマドは急傾斜地や岩盤の凹地に定着しているなど、のり面への適応力は大きいと思われる。なお、ホザキナナカマドはバラ科ホザキナナカマド属の植物で、のり面での樹高は1~1.5 m程度。林縁の陽当たりの良いところに群生する落葉低木で、8月に小さい白い花が集まって円錐状に咲き¹⁾、種子は9月頃成熟し²⁾10月頃飛散する。北海道・本州(下北半島)に自生し、朝鮮・中国・モンゴルに分布すると記されている³⁾。北海道東域では、海に近い釧路湿原から標高1,500 mの大雪山系石北峠まで広く分布している。

種子は、長さ4~6 mm 巾0.3~1 mmの線形で、枯れた花穂が揺れると秋風によって群れて飛んでいく。風散布の型と

しては、シラカンバのように翼がついていて滞空時間が長いタイプではなく、直線的に滑空するタイプである。紙飛行機でたとえると、尖った三角形のジェット機(もしかするとロケット)タイプといえる。採取時の発芽率は80%程度あるが、小粒の種子にありがちな発芽能力が持続しない性質のようである。当年採取の種子を植生マットに入れて晩秋施工したところ、翌春には出芽が認められ3年後には樹高30 cmに育った。しかし、周辺の草が繁茂して日射が遮られると、生長が衰える傾向にある。種子から繁殖させる場合は、十分な日射と安定した水分供給が両立できる工夫が必要だろう。

また、株からは長く強靱な根茎が伸びて、ところどころから萌芽する。萌芽した根茎を切り離し、ポットに移植して養成すると立派な株に育つ。砂礫地に自生していた樹高約10 cmの苗を晩秋に採取し、直径12 cmのポットで育成すると、翌年の秋には樹高15 cmとなった。同じものを畑で育成すると、6~8月に急激に伸長し樹高約50 cmとなり開花・結実した。生育基盤を改良すると、伸長が著しい植物種である。種子播種が不適な時期には、萌芽した根茎や苗の移植は良い方法かもしれない。

かつて見た香港合戦映画では、空の色が変わるくらいに矢が群れて降り注いでくるシーンがあった。のり面へ向けて種子が毎年降り注ぐように、のり肩やステップにホザキナナカマドの株を配置することも、繁殖能力を有効に活かす方法であると思う。自生種の繁殖には、供給量やコストの面など、様々な制限要素がある。様々な工夫と完成までの時間に余裕を持つことが、必要であると思われる。

“地域の自然環境と調和する自生種をのり面緑化に”，と考えるとどうしてもローカルな話になってしまう。植物種として汎用性のあるものを紹介できなくて残念ではあるが、同じ課題を抱えて奮闘しておられる技術者の皆様の励ましになれば幸いです。

引用文献

- 1) 滝田謙讓 (1987) 東北北海道の植物, カトウ書館, 331 pp.
- 2) 佐藤孝夫 (2004) 新版北海道樹木図鑑, 亜細亜社, 148 pp.
- 3) 佐竹義輔・原寛・巨理俊次・富成忠夫 (1989) 日本の野生植物木本, 平凡社, 186 pp.





シラカンバ種子

ホザキナナカマド種子



ポットで発芽した稚苗



植生マット施工翌春の状況
まばらに出芽している



植生マット施工後3年分の状況
ヤマハンノキとホザキナナカマドが定着した



ホザキナナカマドの根茎



河岸積ブロックのホザキナナカマド群落(上川町)



切土のり面のホザキナナカマド群落(釧路市)



岩盤に侵入しているシラカンバとホザキナナカマド(上川町)